

平成25年度 最優秀・優秀作品

テーマ 「ふるさと」

※平成25年度より「一般の部」「小・中・高等学校・大学の部」のエッセーのテーマを1つにしました。

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「第二のふるさとと呼ばせて」

豊後大野市 古賀 深雪

今から約四年半前、私の夫は大分市から豊後大野市に転勤になった。当時、息子が小学校入学をすぐに控えていたので、夫が単身赴任することになった。それから一年間、何度か豊後大野市の夫の家まで息子と娘と通ううちに、農村景観百選等選ばれた美しい風景に魅了され、残る家族も翌年度から移住することになった。

家族の新しい家は、町役場から車で約十五分の場所で、窓からは美しい棚田が見える。耳を澄ますと小川のせせらぎや野鳥のさえずりが聞こえ、ふるさとのようにどこか懐かしい雰囲気がある。小学校や商店街はやや遠いが、車があれば思ったほど不便はなく、渋滞もない。約九万年前の阿蘇の噴火によるといわれる雄大な地形は、大きな懐のように新入りの私たちを寛大に包んでくれるようで、新生活への不安を取り除いてくれた。地域の方々も温かく迎えてくれ、子供の声^{うれ}がして嬉し^{うれ}いと、息子たちをかわいがってくれた。

新しい生活にも何とか慣れ、統合した新生小学校での息子の学校生活も始まった。一学年一学級で、同級生以外の友達もたくさんできた。お互いの家が離れているが、いくつかの地区で集まって、夏には近くの川に泳ぎに行ったり、冬にはクリスマス会をしたりと、家族で仲良くさせてもらった。家に居ながらにして野鳥の観察ができた^り、夜には満天の星が見えたり、近所のお寺では地蔵盆やお月見会などの季節の伝統行事に参加させてもらったりと、息子たちにとっては、貴重で楽しい体験をすることができた。

そんな中で、特に強く心に残っていることは、いろいろな祭りに家族で出かけたことである。夏祭りや秋祭りの他にも花の祭りなど、町をあげての祭りもあった。農繁期の合間を縫^はって、受け継いでこられたのだらうと、昔に思^しいを馳^せせながら、多くの地域の勇壮な神楽や獅子舞も観てまわった。無形民族文化財として、今後も伝承されてほしいものである。息子たちは子供和太鼓クラブに所属させてもらい、祭りや地区の文化祭の

ページや、高齢者施設などでたたかせてもらった。伝統芸能を近くで観たり、演奏でお年寄りの方々に元気になってもらう姿を見たりして、学ぶこともたくさんあったようである。

また、下の娘が近くのへき地保育園に通ったことも、思い出深いことである。閉園までの最後の二年間を、少人数ながらも楽しく、自然の中でのびのびと過ごすことができた。閉園式では、集まった地域のみinnで今までを懐かしみ、唱歌「ふるさと」を歌い、さびしさを分かち合い、未来へ希望を託した。ふるさとが直面する少子高齢化・過疎化という避けがたい厳しい現実をひしひしと感じた。一方で、その課題に対し、町の活性化や農業などの多方面から、ふるさとを守ろうと頑張っている人々もたくさんいて感銘を受けた。

こちらでの滞在期間もあと少しとなってしまった。息子たちはこの地や友達と別れたくないと言っているが、「いつか戻ってこられる、第二のふるさとができたんだよ。」と話している。先日のお盆も、ふるさとに帰省した人々が多く、町がにぎやかに感じた。先祖の供養や盆踊りが行われ、町内各地では松明の灯がともされた。ふるさとに老若男女が集い、一緒に過ごす時間はとても貴重に思われる。この後はまた静かな日常に戻るが、私たち家族も残された時間を大切に過ごしたい。この第二のふるさとでは、たくさんの人々との出会いがあり、かけがえのない家族共有の心の財産となった。心温かい人々がいて、懐かしい風景があつて、戻りたいときに戻れるふるさとが心の中に新たにできたことは、とてもありがたく、今後の心の糧になよと思う。この心の拠り所と、美しい思い出、そして貴重な体験を大切に胸に抱きながら、次の場所でも励んでいきたい。そしてまたいつか、この第二のふるさとに家族で戻ってきたいと思う。

【一般の部】

優 秀 賞

「別府の誇れる銭湯文化」

別府市 後 藤 元 子

私は別府に生まれてから、別府で育ち、別府で暮らして50年が経った。50年間別府で暮らして一番誇れるものは「銭湯の文化」である。私が子供の頃は、町内のよほどの裕福な家でない限り殆ど^{ほとん}の庶民の家に風呂は無く、みんなが銭湯に行っていた。

高校を卒業して大分市内の会社へ就職したある時、私は職場で「昨日お風呂に行って…」と話しをしたら、先輩から「お前、風呂に行くんか」と聞かれたことがある。私は「行きますよ」と、「失礼な、」とでも言わんばかりに答えたが、先輩は「俺は行かん。風呂は家にある」と言った。私は一瞬その先輩を風呂嫌いの不潔な人かと疑ってしまうくらい、「風呂に行く」ことは、私の身に染み付いていたのだった。

銭湯に行けば、たいいてい近所のおばちゃん達が井戸端会議をしている。優しいおばちゃんもいれば、怖そうなおばちゃんもいるが、話の内容の多くは人の噂話である。小さい頃から私はそんな世間話を耳にしながら風呂に入り、社会性を磨いてきた。一般的に、子供は大人に影響されやすいと思われやすいが、子供は子供なりに意外と冷静に大人たちを観察していて、「この人は、相手によって話が変わる」などはお見通しで、ちゃんとした評価をしているものだ。もっと大げさに言えば「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」の挨拶・「お天気がいいですね」「暑いですね」「寒いですね」の会話力・相手の人間性を見抜く観察力などは、銭湯という学校で実践を交えながら学んだ、といっても過言ではない。とにかく、銭湯に行けば多大な近所の情報を受け取る事ができたのである。

私が小学校から中学校にかけて新築する住宅には、お風呂がつくようになった。お風呂がある家を見て、とても近代的な家だと感心したことをよく覚えている。そうやって、町中が全員銭湯へ行く、という時代がだんだん終わっていった。

私は今、子供時代に通った銭湯からは車で15分

くらい離れた町の団地に住み、いまだに銭湯に行く生活をしている。銭湯に行く時間帯は毎日だいたい決まっていて、一緒になる顔ぶれも同じであることが多い。自然と「熱い湯の時間帯」と「温めの湯の時間帯」が、暗黙のうちにできていることも面白い。私もいつもと違う時間帯に風呂に行き、いつもと違うメンバーの時には、ちょっと湯が熱いと思っても黙って入りソソクサと帰る。当然のことだが遠慮しているのだ。これもひとつの「銭湯の文化」だと思って面白がっている。

今から約10年ちょっと前、小学生の2人の息子を抱えて私は離婚した。長男はそろそろ思春期に突入する時期だったので、私は子供のことに何かも自分でやろうと思わないことにした。既に今住んでいる場所にて銭湯に通っていたので、「丁度良い。銭湯で会うおじさん達に子供をお願いしよう」と思った。

特に誰かに何かを頼んだ訳ではないが、私の思惑通り銭湯に来るおじさん達は子供達に関わってくれた。

「お父さんはどうしたんか」と普通に聞いてくるおじさん、「学校でどんな勉強しよんのか」と気に掛けてくれるおじさん、風呂に入る前に将棋の相手をしてくれるおじさん、「水を入れるな」と理不尽に怒鳴るおじさん。私が子供だった頃のように息子達も自分の目でおじさん達を観察し、良い社会勉強をさせてもらったに違いない。私は子育てを銭湯のある町でできたことに心から感謝している。

最近、家にお風呂があっても時々「スーパー銭湯」にいく人達が多い。だが、「スーパー銭湯」と地域に密着した銭湯とは、全くの別物であると私は思っている。私は別府の住民に、「ぜひ、近所の銭湯に行き、煩わしい人間関係を積極的に持って下さい」と、大声で言いたい。きっと自分の住んでいる町をもっと好きになると確信している。

【一般の部】

優 秀 賞

「ふるさとを元気にするために」

大分市 福 嶋 祐 彦

ふるさとに力がなくなっている。地域のコミュニティが力をなくし、地域の教育力が薄れた結果がここに表れているのではないか。

今、ふるさとの教育力を高めるためにできることはなんなのだろうか。

ふるさとと問われれば、幼いころの思い出に行きつく。秋の夕暮れ、こづみあげられた稲藁の山、脱穀したもみ殻を焼くいがらっぽい煙の匂い、白く漂う煙の帯。暮れゆく遠く山々と、黄金色に輝く夕方の空。私の記憶のふるさととは、農村の景色に始まり終わる。近所の子どもたちと、泥まみれになりながら暗くなるまで遊んだ記憶は今も心に鮮やかだ。

刈り取りが終わり、広々とした田は子どもにとって格好の遊び場だった。あぜ道を走りテレビの「戦隊もの」の真似をして進んでいたとき、大きなとなり声がした。

「こらあ、何しよんのか」

顔見知りの老人だった。いつも無口で草刈りなどをしている老人のただならぬ表情に、私たちは驚き、しょんぼりしながら老人の前に並んだ。

「田んぼにとってな、畦は大切なものや。遊びでも畦を壊せば、来年畦塗りをして水を入れたときに、水漏れを起こすんや。水が漏れたらな、田んぼに稲が植えられんようになる。稲を植えられんとな、米を作ることもできんごとなる。わかるか」

子どもにもわかるように語る老人の言葉は、しみ込むように子どもの心に落ちた。

老人の他にも、あちこちで大人の姿があった。優しく時には厳しく接する大人たちは、私たちに地域で生きていく様々な知識を与えてくれたような気がする。学校で学ぶ知識も大事だったが、地域の人々から見守られながら学んだ事は、今も生活の中に生きている。

便利な生活を求めて、住んでいた地域を離れ都市部に移住する家族が増え、核家族化が進んだと言われた昭和四十年代。あちこちからの集まりで

できたコミュニティに、地域の中にあつた「見守り」は薄くなった。自治会や子ども会で、コミュニティの必要な部分は補えたが、それ以上の機能は果たせなかったようだ。

学校で子どもたちが学ぶ知識は膨大である。

将来、様々な職業を選ぶ力、職場で学び働くために必要な力、学問を探究し答えを求める力。そのような力を身につけるための知識だ。それは、必要不可欠なものであり、どれ一つをとっても、欠かすことができないものだ。しかし、地域で学ぶ力をじっくり学習する機会は少ない。

自治会の活動で、小中学生とキャンプをしたことがある。祖母山の山麓で二泊三日のキャンプだ。夕食は飯盒炊爨。子どもたちは食材を前に作業に取り掛かる。

しかし、火を熾せない。ライターを使って火をつける。用意していた新聞紙は燃えるが木には火が移らない。何故も新聞紙は灰になるが火は熾きない。じゃがいもの皮をむこうとする中学生。包丁の刃を自分に向けて皮を剥こうとする。

彼らは不器用ではない。学んでいないだけなのだ。木をやぐらに組み、いもの様に堅く丸めた新聞紙を中に入れ、火を付けさせるとうまく火を熾すことができる。包丁の刃を自分に向けると自分を傷つけるから、反対の方に向けるとよいと言うと作業を始める。要は学んでいないだけなのだ。

ふるさとの教育力を高める策がここに見えてくる。地域で教える知識を、地域の団体と学校が協同して教えることで、子どもたちは生き生きと育つのである。

公民館主催のキャンプ体験事業、NPO法人主催の「水辺の楽校」など、多彩な取り組みが行われているが、まだまだ学校と連携しての取り組みは多くない。学校に連携用の要点を配置して、地域との連携を強化することで、ふるさととは元気になることができるだろう。その日が来るのを夢見たいものである。

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

ろっ か さ こ
「六ヶ迫」

大分県立大分鶴崎高等学校 2 年 木 村 カロリーナ り え

入道雲が浮かぶ空。クーラーの効かない車の中で、私は窓から腕に落ちてくる日差しを見つめていた。風は一瞬だけ吹き、葉を揺らして少しの涼しさを置いていく。さざ彼のような蝉の声を聞きながら、車は六ヶ迫に着いた。私は夏の暑さに浸った。母はこの六ヶ迫の水が好きだ。ようやく就けた仕事である化粧品セールスをしている中で、最近 顔なじみとなった人から、ここの水を勧められたそうだ。健康にいいのだと、嬉しそうに言っていたのを覚えている。

父と別れて、まだ幼い姉と私を、異国人の母はその手だけで育ててきた。父から生活費は望めないし、この日本に身寄りもない。二児の母でありながらも、私達の手を握るその手は、とても頼りなかった。毎日毎日が貧乏続きで、豪勢な旅行なんかできない。週末はよく、母は私達を六ヶ迫へ連れて行った。

家を出て十五分程で、田んぼの中を進みだす。山を上り鬱蒼とした緑の中を通ると、車が一台しか通れない道に出る。澄んだ水の流れる川が左側に、伸びた木々や露出した岩肌が右側に見えた。木々が頭上に天然の屋根を作り、この道はいつも優しい暗さを帯びていた。涼し気な木陰の中を進むと、ぽっかりと明るい場所に出る。そこが、六ヶ迫だった。

階段を降りて木製の小さな橋をギシギシ鳴らして渡ると、目の前に仏様が見える。横に丸い井戸があって、傍に柄杓が数本置いてある。後ろには小川が流れ、水が日差しでキラキラしている。母はいつもその井戸から水を掬い、ペットボトルに入れていた。その水は鉄っぽい味と炭酸が特徴的で、お茶を薄めたような茶色をしている。体によくて、そんな水を子供だった私と姉が美味しいと思うわけがなく、姉は一度口にしたりきりだった。幼い私は、姉への対抗心と大人ぶりたいのも手伝って、あえて飲んだものだった。神妙な面持ちで柄杓に口をつける私を、母は歯を見せて笑った。今思い出すと、幼かった自分が恥ずかしいのと母の心境を思い、微笑んでしまう。

そんな週末のある日、姉が友達と遊びに行ってしまう、母と私だけで六ヶ迫に行くことになった。姉がやることを何でも真似し、傍について離れなかった私は、姉が自分を置いて行ったことが悔しくて寂しくてならなかった。機嫌を悪くした私は、六ヶ迫に着いても仏頂面で、母に車で待つと言った。母は何度も私を誘ったが、動かないので諦めて肩を落とし、気をつけるように言うと、井戸へ向かった。車に残った私は、眉を寄せて窓から見える風景を見ていた。照りつく太陽の光でどこも輝いて見えた。車の中は熱く、背中や首を汗が流れる。ジージーと鳴く蝉の音が楽しそうに聞こえて、私はじわじわと悲しくなっていた。ここに今私は一人だけ。泣きたいのを我慢して車のドアを開け駆け出した。転ばないように気をつけて、階段を降り橋を渡ると、私はペットボトルに水を入れる母の後ろ姿を見たのだ。

夏の日午後。身を焦がすような強い日差しと一面に生い茂った緑の中。あの時間こえていた蝉の声は、遠くに流れていた川のせせらぎは、窓から流れこみ私の腕に落ちていた日差しは、どんなに綺麗だったか。あの時柄杓で水を掬う母の後ろ姿は、振り返り安心したように笑った母の顔は、大雑把に結われ、日差しを反射していた母の髪は、どんなに美しかったか。私はすぐさま母の体へ飛びつき、離すまいと母の服を握りしめた。母の水に濡れた手が私の体を抱きしめる。服に染みこむ冷たさを感じながら、私はただ母の鼓動を聞いていた。母に添って私の鼓動も揺れていた。

今となっては、六ヶ迫に行くこともなくなった。だが、夏の明るい日差しに照らされて蝉の鳴き声を聞くと、何かが心の中に込み上がってくる。人は、今という時に体を向けていながらも、過去の思い出が心の奥底で自分を支えていることに気づく時がある。この心の暖かさが、生きる糧になっているのだろうか。自分の道を歩まねばならない年齢である私は、この思い出を抱きしめずにはいられない。

【小・中・高等学校・大学等の部】

優 秀 賞

「神楽を受けつぐ」

竹田市立菅生小学校5年 宮 本 大 輔

ドンドンチンチン…今年も子ども神楽の練習が始まった。

ぼくたちは、菅生小学校文化財愛護少年団活動として、ねぎの子ども神楽に取り組んでいる。ぼくは、五万礼始ごほうれいしの舞を舞っている。五万礼始は、神楽の一番最初に、火の神、水の神、木の神、土の神、金の神に、ささげるゆっくりした足はこびの舞だ。

今年も、九月に行われる「ねぎの大祭」に向けて、六月から練習を始めた。舞は、ねぎの神社の神楽座の佐藤さんに指導していただいている。夏休みに入ってから、夜、集中して練習をした。

ぼくは、佐藤さんから、「舞は、覚えているから、もっと自信を持って舞いよ。」

と言われた。だから、練習の時は、手を大きく広げて、しっかり前を向いて舞うように気をつけている。佐藤さんの舞は、動きがやわらかくて、やさしくゆったりしている。

「サーエイサー。」

と言うかけ声やすずの音は、太こや横笛のおはやしと、よく合っている。ぼくは、いつも佐藤さんの舞を見てまねをしていた。今年は舞を覚えたから、一人でも舞えるように練習しようと思う。

神楽座の指導者の方々は、佐藤さんだけでなく、みなさん汗びっしょりかいて指導して下さる。五万礼始のほかに、岩戸舞やしば引きの舞を一時間ぐらい、いっしょに舞いながら教えて下さる。こんなにみなさんが一生けん命数えて下さるのは、どうしてかなと考えた。

神楽座の松井さんは、六十年もねぎの神楽をしている。今も面を作ったり、ぼくたちに衣しょうを着せてくれたりする。松井さんは、「ねぎの神楽は、二百年前から伝わっています。

昔は、ご神面をつけて家々をまわり、その後を子どもたちがついて行って、とてもにぎやかでした。今は人が少なくなったけれど、菅生小の子どもたちが、子ども神楽をしてくれるから祭りがもり上がる。」

と、話してくれた。

ぼくは、神楽座のみなさんが汗びっしょりになって教えてくださるのは、何百年も伝わっている伝統を伝えてくれているのだと思った。

今年の「ねぎの大祭」は九月二十八日だ。ぼくは、りっぱな衣しょうを付ける。そして、しっかり声を出して堂々と舞おうと思う。そのために、何度も練習し、五万礼始を自分のものにしたい。それが伝統を受けつぐ事なのかなあと思う。

【小・中・高等学校・大学等の部】

優秀賞

「あの時計」

大分県立大分豊府中学校 2 年 小代星希

僕は小学一年生のころ、とある近所のおじいさんとおばあさんと知り合いになった。初めて二人に出会ったのは学校から帰っている途中だった。帰り道にあるスーパーから重そうな荷物を持って出てきたので、友達といっしょに荷物をもってあげて、おじいさんとおばあさんの家まで行った。そして、家にあがらせてもらったのだ。おじいさんとおばあさんは、一和さんと、ちひろさんという名前だと教えてくれた。家はとても広く、庭には池があり、鯉を飼っていた。一和さんの部屋には、数えきれないほどの時計があり、その日は、ずっと友達と一和さんから時計の話聞いた。そしてそれ以来ずっと一和さん達の家へ行き、さまざまな事を教えてもらうようになったのだ。夕方、夕日が出ていたら次の日は晴れるということや、一和さんの持っている時計についてのこと、鯉を飼う時に注意すべき点や鯉のコンクールで優勝したことなど、たくさん教えてくれた。小学二年生になり、一和さんの家には一人で行くようになったけれど、一和さんとちひろさんはまるで祖父母のように優しくかった。自分の家に帰っても、父と母に今日こんなことをした、やれこんなことを聞いたと、毎日話した。このころ一和さんの家に行くのが一番の楽しみだった。

夏休みも終わりに近い日、いつものように一和さんの家に向かった。けれど一和さんはおらず、ちひろさんだけだった。一和さんはどうしたのか聞くと、入院したということだった。信じられなかったし、信じたくなかった。前日まで普通に話していたのに…。入院した理由は前から患っていた病気が悪化したからということで、その病気は肺癌^{がん}だった。今回は二回目で、前は首にあったので取り出すことができたけれど、今回は肺にあるので取り出せないらしい。それから数週間後、一

和さんの家へ行ってみた。一和さんの優しい顔と声はもう僕には届かなくなっていた。亡くなったのだ。そしてちひろさんが僕に一和さんの遺書を読んでくれた。前半は身内の方々に対しての文章で、後半は僕に対してだった。もう六年も前のことだがはっきり覚えている。

「星希君、君と会えて本当に良かった。君にはもっともっといろんな事を教えたかった。けれど私にはもうできない。おわびといっは何だが大正三色の鯉の稚魚を二匹とあの時計をあげよう。君と会えて本当に楽しかった。ありがとう。私は本当に幸せだった。」

僕はその時、涙が止まらなかった。そのあと鯉を二匹と、あの時計をもらった。あの時計とは、一和さんのお気に入り、僕が大きくなったらあげるという約束をしていた時計だ。三人で写った写真ももらった。僕の机の上で今でもあの時計は力強く動いている。そしてその隣の写真の中で一和さんは優しい顔を浮かべている。

【小・中・高等学校・大学等の部】

優 秀 賞

「去っていく時間」

大分県立芸術文化短期大学 1 年 工藤明日香

「おばあちゃん、きたよ！」幼稚園の頃の私は、毎週土曜日になると、実家と遠くない祖母の家に泊まりに行っていた。おばあちゃん子だったため、毎週泊まりに行くことが楽しみでしようがなく、祖母に会える前日は夜も眠れぬ程であった。

祖母の家には、ミーコという目の青くて、毛の長くまっ白でとても上品な猫がいた。当時から体が弱く喘息ぜんそくの発作がすぐにでる子供だったため、ミーコにあまり触るなと言われていたが、動物好きの私は誰の注意も聞かず、泊まりに行った夜は、毎回喘息に苦しんでいた。呼吸がうまくできないために、寝転がることさえもできず、眠れなかった。そんな私の背中を祖母はずっとさすってくれていた。「大丈夫、大丈夫」の声は、本当になんでも大丈夫になる気すらしていた。本当に喘息が治る気がして、涙がとまっていたのだ。祖母の愛情パワーは本当にすごいのだ。しかし、愛情パワーもむなしく、毎週日曜日の朝には病院に行く羽目になっていた。

そんな苦しい思いをしながらも、祖母の家に行っていた理由は、祖母が好きだからだけではない。祖母はいろいろなことを教えてくれた。祖母はとにかく料理が上手で、何を食べても美味しかった。その中でも、格別に好きだったのが、だんご汁。だんごを一緒に伸ばすことが楽しくて仕方がなかった。最初はうまく伸ばせなかった団子を、丸めて粘土代わりに遊んでいたのだが、うまくできると、ほめられたために集中して団子を伸ばした。分厚くいびつな私のだんごと、薄くて形のきれいなおばあちゃんのだんご。どの団子をどちらが作ったかは、一目瞭然であったが、その差も小学校高学年になると、埋まっていた。今それを思い出すと、ノスタルジックになるのは、私が少し大人になったからかもしれない。

苦しい時は誰よりも先に助けてくれ、だんご汁のほかにも色んなことを教えてくれた祖母。いつまでも一緒にいてほしいと願っていたが、そんな

祖母もいつかはいなくなると、悟ったのが中学一年生の時だった。祖母は「胃がん」と、医師に宣告されたらしい。親戚が話していることで知ってしまった。しかし、私が知っていることを知らない、両親と祖母は私に黙っていた。だから私も知らないふりをした。「成人式の姿を見るまでは死なれんなあ」「ひ孫の姿見たかったわ」なんて、弱音が聞こえても「何言いよんの」と、笑いながら、祖母の言葉を聞き流すことしか私にはできなかった。それが精一杯だった。そんな言葉を聞いた夜は、祖母がいなくなることの怖さで、一人枕を濡らした。

しかし、それでもその時はやってきた。高校一年生の秋に病院に呼ばれたとき、もうこれが最後の時なのだと知らされた。笑顔で見送ろうと決心して、病室のドアをあけ、ベッドで眠る祖母の近くに行った。話しかけようと口を開けたが、言葉が見つからず、涙しか出てこなかった。病室の隅にあった丸イスに腰掛け、私は外の景色を見ながら泣いた。視界に入る祖母の姿には、耐え切れなかったからだ。しかし、それが今でも悔いなのだ。もっともっと、話したかったことはたくさんあったのに。家族や親戚。たくさんの人に悔やまれながら、祖母はその日この世を去った。泣いても泣いても、涙は涸れないことを知った。

ふるさとといえば、普通、両親とともに育ってきた家なのかもしれないが、私は違う。祖母と過ごしてきた時間だ。もう、祖母のいたあの時に戻ることはできないが、思い返すことならできる。天国できっと待っていてくれる祖母のもとに行くのは、あと何十年後の話になるかはわからないが、成人式の振袖の姿も、私の子供の姿も全部全部、写真に収めて、祖母に見せたいと思う。しかしそれは、私が今度はおばあちゃんと呼ばれ、孫にふるさとを作ったあとの話だ。それまで待っていてね、おばあちゃん。

